

平成27年度事業計画書・収支予算書

自 平成27年4月1日
至 平成28年3月31日

一般財団法人日本色彩研究所

I 事業計画書

1. 本年度は以下の研究を実施する（詳細を4.資料に示す）

- (1) 白色量・黒色量・純度に基づく新しい色体系による色票集の開発
- (2) 色票における塗膜柔軟性向上技術の開発
- (3) 標準白色板の校正に関わる研究
- (4) 薬剤注入器とパッケージのカラーデザインによる誤選択防止に関する研究
- (5) 海外の色彩マーケットと色彩意識に関する研究
- (6) 景観条例データベース化および検索システムの開発に関する研究
- (7) 女性服装色の経年変化についての研究
- (8) 社会人教育「塗装業の色彩学習講座」の開発に関する研究
- (9) カラーレンジマニュアル改訂版作成のための調査研究

上記の研究成果は、所内研究発表会を開催して報告する。

2. 本年度は以下の事業を実施する

(1) 産業界、教育界との協力

官公庁、教育界、産業界からの受託研究業務として、次の事業を実施する。

- (a) 標準化事業：Hue-Tone システムによる色票集の開発を進める。
- (b) 調査研究：各種製品色の提案、色彩調査を実施する。
- (c) 技術指導：色彩の産業応用に関する技術指導及び製品開発の指導・監修を実施する。また、色彩教育用教材などの色彩用具・資料の開発を進める。
- (d) 測色試験：標準白色板の校正試験等依頼試験を実施する。
- (e) 講座会：定期開催の色研セミナー(2.参照)及び企業への講師派遣を実施する。
- (f) 色票依頼：各種用途の色票製作を実施する。

なお、(a)～(e)の事業は、公益目的支出計画の継続事業として実施する。

(2) 講習会、色彩講座の開催

定期開催の色研セミナーとして、下記の専門講座を開催する。

色彩指導者フォローアップ講座	2回
色彩管理士認定講座（第10期）	1回
色彩心理、カラーデザイン関連講座	3回
景観色彩計画関連講座	1回
色彩工学・技術関連講座	6回

(3) 定期刊行物及び広報等の活動

機関誌「色彩研究」Vol.61 No.1、Vol.61 No.2 の発行

広報誌「COLOR」No.163、No.164 の発行

メールマガジンの発行

ホームページ <http://www.jcri.jp/> 更新は年 4 回程度を予定

(4) 学会及び論文発表

当研究所紀要のほか、日本色彩学会、照明学会、日本人間工学会、日本デザイン学会、日本建築学会、日本心理学会、日本くすりと糖尿病学会、日本プラント・ヒューマンファクター学会、人類働態学会などでの論文投稿、大会発表を積極的に進める。

3. 処務関係

本年度は以下の会合を予定している。

(1) 評議員会 1 回開催

(2) 理事会 3 回開催

4. 資料 (研究項目概要)

(1) 研究項目 白色量・黒色量・純度に基づく新しい色体系による色票集の開発

主任研究員 小林信治

研究着手年月日 平成 27 年 4 月 1 日

様々な体系の色票集を開発・製作してきたが、最近ではマンセル表色系のよるものが主となっている。また、Hue-Tone システムとして普及している PCCS も基準値の未確定といった理由などからクロマトン 707 以来、標準となり得る色票集は制作されていない。一方、「Hue-Tone システムの基準値の設定方法の開発」から白色量・黒色量・純度に基づく色体系によって Tone を合理的に表現で得ることが判った。そこで Hue-Tone システムに対応できる新たな色票集として白色量・黒色量・純度に基づく新しい色体系に基づく色票集を開発する。

(2) 研究項目 色票における塗膜柔軟性向上技術の開発

主任研究員 前川太一

研究着手年月日 平成 27 年 4 月 1 日

J I S 標準色票等の色票集を製作する際、加工時における塗膜の割れや欠けの発生により色票集としての体裁や歩留まりに制約が生じる。それらの発生原因は、塗膜の柔軟性が不足していると推定される。解決策として塗膜の柔軟性を高める添加剤の使用が考えられるが、添加剤による乾燥不良、光沢変化、色変化が生じる問題がある。これらの問題は、添加量の最適化によって解消されるが色票における最適値は明らかではない。また、添加剤の効果を評価するには、色票の柔軟性を評価する基準の作成が必要である。作成した評価基準を使用し、数種類の添加剤の添加適正量、塗膜柔軟性、色変化、光沢変化、耐光性を試験し、色票における最適値を明らかにする。

(3) 研究項目 標準白色板の校正に関わる研究

主任研究員 那須野信行

研究着手年月日 平成 27 年 4 月 1 日

標準白色板の分光拡散反射率の校正値は、分光光度計の校正基準として測色上重要である。現在、国家標準にトレーサブルな分光拡散反射率の値付けは、独立行政法人産業技術総合研究所の計量標準総合センター(NMIJ:National Metrology Institute of Japan)で行なわれている。当研究所の標準白色板は長年にわたり独自の校正基準により値付けし供給してきたが、国家標準への整合が不可避となった。本年度は、標準白色板の NMIJ による校正サービスを受け、分光拡散反射率の比較調査を行う。国家標準へのトレーサビリティを確保した標準白色板の供給を目指す。

(4) 研究項目 薬剤注入器とパッケージのカラーデザインによる誤選択防止に関する研究

主任研究員 名取和幸

研究着手年月日 平成 26 年 4 月 1 日

協力機関 新潟薬科大学

多くの糖尿病の患者は、即効型と持続型の 2 種の薬剤を使い分け、自ら注射を行っている。製剤メーカーは、こうした薬剤の取り違い防止のため、注入器ボタンの凹凸や、本体・ラベルの色や文字表記により識別性を高める対策を取っている。しかしながら、新薬については識別色の規定がなく、メーカー間で異なる色が使用され始めている。そこで、識別性・同定性をより高めるような注入器本体とラベルのカラーデザインに関する研究を昨年から開始した。昨年度は高齢者を対象とした現行商品の識別性実験と、薬剤の効き方などの印象から連想しやすい本体色に関する調査を実施した。本年度は、色覚異常の特性による現行の注入器とパッケージの色使いに対する評価を行い、問題点の抽出と改善の方向性を検討する。

(5) 研究項目 海外の色彩マーケットと色彩意識に関する研究

主任研究員 名取和幸

研究着手年月日 平成 25 年 4 月 1 日

平成 25 年度から、海外における消費者の色彩嗜好傾向と、「高級感のある色」というような印象と色との対応に関する現地調査を開始した。初年度のタイ、昨年インドネシアに続き、今年度も新たな調査国を設定し調査を継続する。また、これまでの調査から得られた様々な国における調査データを合わせて比較分析し、各国における色彩意識の特徴を明らかにする。加えて、上記のアンケート調査と同時に現地で行った販売店や街並みの視察調査からも、各国の色彩マーケットの特徴を分析する。

(6) 研究項目 景観条例データベース化および検索システムの開発に関する研究

主任研究員 大内啓子

研究着手年月日 平成 27 年 4 月 1 日

平成 20 年度に都道府県が設定する景観条例を収集しデータベース化を試みた。その実施から 7 年ほどが経過した現在、各自治体では新ガイドラインの追加や修正等を行っている動きが見られる。そのため、最新の景観条例に関するデータを収集し、既存データベースの修正および追加を行う。さらに、修正したデータベースをもとに、NOCS 新カラーシステムや日塗工の色票との対応が取れるよう、使い勝手の良い検索システムを開発する。

(7) 研究項目 女性服装色の経年変化についての研究

主任研究員 江森敏夫

研究着手年月日 平成 27 年 4 月 1 日

当研究所では、1954年から半世紀以上にわたり銀座街頭において女性の服装色を四季ごとに測定している。調査目的は、日本の女性の服装色が、時代や季節により、どのように変化しているかを捉えることにある。これまでも、データの一部は日本色彩研究所の研究紀要「色彩研究」などに発表しており、平成19年には「ファッション・カラートレンド50年—女性服装色の定点観測調査」において、2005年までのデータを用いて色相やトーンのトレンドや季節変動について報告した。今年度は、2006年以降の測定データを追加し、前に行った時系列分析と共に、時系列モデルを用いた予測も行う。

(8) 研究項目 社会人教育「塗装業の色彩学習講座」の開発に関する研究

主任研究員 赤木重文

研究着手年月日 平成27年4月1日

過去2年間にわたり、文科省委託事業のプロジェクトで、社会人教育「デザイン視点によるプロジェクトマネジメント」のカリキュラム開発を行った。そのなかで昨年度は、カスタマイズプログラムとして、色彩を専門にする業種である塗装業の学び直しプログラムの原案を作成した。事前の意見聴取では、塗装会社の塗装工はこれまでほとんど実務によって経験的に色の知識や技能を獲得し、体系的なプログラムを学習した経験はないとのことであった。しかしクライアントから様々な質問を受けることもあり、体系的に色彩を学ぶ必要があるとの要望も多く聞かれ、この結果を受けて色彩導入編の講座を実施し、さらなる学び直しのニーズについて聴取した。本年度は、昨年度の調査データを活用し、塗装業が必要とする色彩の知識や技能について、導入から専門的な内容に至るまでの段階的なカリキュラム開発の研究をおこなう。

(9) 研究項目 カラーレンジマニュアル改訂版作成のための調査研究

代表研究員 名取和幸

研究着手年月日 平成27年4月1日

当研究所が、色から受ける印象や連想に関する調査データと色のエピソード、さらに色名との関連などもまとめた資料集「カラーレンジマニュアル100」を初めて刊行したのは1978年のことである。その後1998年に再び色彩イメージ調査を行い、新しいデータによる改訂版が発行された。2008年には、エピソードの部分の新しい情報への書き換えと検索機能の追加を行い、現在の「新編カラーレンジマニュアル100」の形となっている。そこで、前回の調査から15年ほど経過したため、新たに調査を行い最新データへの更新を行う。また、これまで設定されてきた100色の妥当性も検討し、より有効なデータベースとしての機能を果たすようにする。本研究は、研究第1部全研究員による共同研究として実施する。